

第4回学ぶ喜び・ESD連続公開講座 概要報告

奈良教育大学 中澤 静男

- ◇開催日時 令和元年 11月 25日 (月) 19時～20時 30分
- ◇会場 次世代教員養成センター2号館多目的ホール
- ◇参加者数 93名
- ◇内容 「教員生活は出会いの宝庫」 講師：奥村浩一氏

1. 自己紹介

昭和56年3月奈良教育大学を卒業後 富雄中学校（12年）、
都南中学校（13年）

奈良市教育委員会・奈良県教育委員会
都南中学校・富雄中学校で校長

ほとんどがしんどいことだが、この職業でよかったと本気で思っている。「教員生活は出会いの宝庫」だった。出会いは気が付かないと通り過ぎてしまう。自分以外のひとと毎年毎年出合う。どうしたら、この人が幸せになるだろうかと思いながら過ごしてきた。

子どもも保護者も色々な個性がある。保護者を通してあらゆる職業との出会いがあり、このような人たちで社会ができていることを痛感した。自分が知る社会の狭さに打ちひしがれるとともに、出会いに対して謙虚になる。教員は、人として成長せざるを得ない職業である。新しい出会いは期待と不安が共存している。



2. 教員生活は出会いの宝庫

(1) 自分をポジティブにした経験

中学生の時に会った大阪地下鉄のつりさげ広告：

「あいうえおか」次が気になる！好奇心をくすぐる1冊

なるほど、うまいこと考えたな！ 好奇心という日本語に初めて出会った。

出会いをポジティブにするのが「好奇心」だ。大切なものは「誰に出会ったかではなく、何に出会ったか」それを振り返って考えることが大切だ。出会った時に小さい覚悟が自分の中に芽生えている。それを積み重ねることで成長がある。

(2) 「教員を目指した出会い」

「先生と言われるほどの馬鹿でなし」（父の言葉）：先生と呼ばれるひとに、ロクな奴はいない。
教員に導いた「ソフトテニス」と「水俣病」

小学生の時は運動が苦手だった。中学校でソフトテニスを通じて、先生・先輩・友達と出会った。それが今も自分にとっての宝物だ。職業選択の時、教員なら、働きながらソフトテニスができると思った。高校まで本をほとんど読まなかった。高校で初めて買った本が「水俣病」だった。その影響で、環境保安官のような仕事がしたいと思い、理系に進んだ。第2志望で奈良教育大学に進んだが、そのときには教員になろうと決めていた。公害病の事実を知ることを通じて、自然との付き合い方って大事だと思い、理科の勉強をしようと思った。子ども達に伝えることの大事さを考え、教員になる気持ちを強くした。

(3) 初めての学級担任としての出会い



最初に赴任した富雄中学校は、1 学年 12 学級のマンモス校だった。教員数も多く、なかなか担任を持たせてもらえない。3 年目で初めて担任を持つことができた。自分と同じ干支の 1 年 9 組の生徒たちと出会った。知識もないし、経験もない。やっと担任になったというエネルギーだけはいっぱいだった。これから出会う人たちの人

生に責任を持たなければならないことを教えられた貴重な出会いだった。

(4) 教職員組合との出会い

教員になって、教職員組合に入りましょうと誘われて入った。教職員組合では、教員の労働条件に関わる交渉なども行われていたが、それだけでなく、学校で何を子ども達に伝えるのかについても、いっぱい話しあう機会があった。その一つに部落差別の問題があった。部落差別をなくそうということに異論のある教員はいない。でも、部落差別に対する学校教育での取り扱い方では意見が分かれる。しかし、目の前に子ども達がいる。自分はどうしたらいいのだろうかと思い、地域で社会の問題として取り組んでいる人たちとの付き合い方を考えさせられた。例えば、在日韓国朝鮮人の人たちが本名を名乗ろうという運動があった（差別を受けないために日本名を名乗っていた）。本名を名乗るよう勧めるか、家庭の事情もあるので、学校が介入すべきではないのか、意見が分かれた。しかし、目の前には当事者である子どもがいる。障がいのある児童生徒の修学場所をどこにするかの問題もそうだった。地域の学校と特別支援学校のどちらが、子どものためになるのか。どっちでもいいというような、無責任なことは言えない。人権について自分事として考えていかなければいけないという覚悟ができた。

(5) 学校の荒れとの出会い

放課後に教室に行くと、机の上に寝そべてテレビを見ている女子生徒達があった。何を話したかは忘れたが、言われたことは今も覚えている。「おまえも来年はいないんだろ」。毎年 20 人ずつぐらい先生が入れかわる。3 年間続けて子ども達を見ている教員の方が少ないという現実。子どもらが、大人を信用していないということだ。転勤を自分から希望することは止めようと思った。目の前でガラス 200 枚を割りまくる生徒を前にした無力感。教師を辞めようと思った。それでも「先生、頑張って」という人がいっぱいいる。その人たちのためにも頑張ろうと思った。大人を信用していない子どもには、本気で関わらないといけない。子どもに本気やなあと思わせるまで、やらないといけないと思わせてくれた。本気で向き合わないといけないという覚悟ができた。

(6) 全国優勝したい生徒との出会い

この子たちに出会わなければ、避けて通りたい道だった。自分の時間、家族と過ごす時間がなくなってしまう。全国優勝を目指す指導者の覚悟（家族には申し訳ない）だ。自分には一つの夢があり、



チームを作るのであれば、ソフトテニス在全国で一番好きな生徒にしたいと思っていた。それがエネルギーだった。もう一つは、レギュラー以外の子どもたちをどれくらい大事にできるか、どの部員も自分を大事にしてほしいという願いがあった。「勝ちたい、勝ちたい負けのもと」が合い言葉だった。勝負がかかったときに平常心を保つことがこんなに難しいのかと、直面した。指導者である私は、自分の思ったとおりにならないときに感情的にならないように、子どもを育てると言うことに徹することを学んだ。この子らと出会って、本気で臨んだら実現できることがあると教えてもらった。

初めて経験する縦の組織だった。ぜひ行きなさいと勧めはしないが、経験できる機会があれば経験しておいた方がいい。学校はみんなが同僚だ。でも、行政は違う。組織で動くため、なかなか進まない。学校は法律に決められたことをしている組織であることに気が付いた。役場には色々な役割の人がいる。いろんな人と会おううちに、何処に何を言えば話が前に進むかがわかってくる。いつか学校現場に戻ったら、先生方の役に立つ人になろうという覚悟ができた。

(7) 教育行政との出会い

初めて経験する縦の組織だった。ぜひ行きなさいと勧めはしないが、経験できる機会があれば経験しておいた方がいい。学校はみんなが同僚だ。でも、行政は違う。組織で動くため、なかなか進まない。学校は法律に決められたことをしている組織であることに気が付いた。役場には色々な役割の人がいる。いろんな人と会おううちに、何処に何を言えば話が前に進むかがわかってくる。

いつか学校現場に戻ったら、先生方の役に立つ人になろうという覚悟ができた。

(8) 校長として地域の人たちとの出会い

損得抜きで地域を愛する人たちに出会えた。子どものために、エネルギーに活動している人、子どものために、学校のために、本気で活動する人たちと出会った。このエネルギーの源は何だろう。子どもは地域の宝だと本気で思われている。生きがいを教えてもらった。一生、誰かのために生きていこうという覚悟ももらった。

(9) 一般社会から見た教員という職業

「先生のおかげ」と「先生のくせに」

教員は、成長過程で会会う数少ない大人。子どもへの影響力が大きい。子どもの手本となる社会常識のスタンダードだと思われている。だから「先生のくせに」とも言われる。「学校の常識は世間の非常識」ということもある。そう言われないようにしようと言い合っていた。

先生という仕事とはと聞いても、「きつい」「尊い」「難しい」、といったアバウトな言葉しか返ってこない。完成形のない仕事だ。「いい先生」とか「悪い先生」とか言うけれど、「いい先生」ってどんな先生だろう。画一的な答えはなく、人それぞれ幅がある。一方、こんな先生は嫌だは、共通している。インターネットの情報だが、

第5位：自分の考えを一方向的に押し付けてくる

第4位：生徒を馬鹿にしたいい方

第3位：生徒に厳しいが自分に甘い

第2位：その日の機嫌で態度が違う

第1位：えこひいきする先生 だ。

これにあてはまらないと、だいたいいい先生だということ。当てはまる先生も、実は自分をスタンダードだと思い込んでいる。自分の価値観を客観的に見つめ直し、追究することを求められる仕事。

個性は大事だが、このベースの上に個性があることを認識してほしい。自分をどれくらい客観的に見ることができているかを、いつも点検しておく。

(10) 参考に

教員という仕事は、4月1日になったら研修期間なしに「プロ」（専門家）デビューという怖さがある。子どもからは先生と呼ばれ、保護者からはよろしくお願ひしますと言われる。以前、奈良県には教師塾というものがあつた。そこで、採用1・2年目の先生方「新任教員」たちがつくつた「はじめの歩」がある。（「奈良県先生応援サイト：<http://www.nps.ed.jp/ouen/data.html>」）

新規採用教員のための常識ノート

とくに「はじめに」がいい。「教師としての第一歩は、同時に社会人としての第一歩でもあります。保護者や地域、同僚といい関係を築いていくには、ちょっとした気配りや心配りが必要です。」「皆さんは、決して一人ではありません。」 一度、見ておいてほしい。

(11) 皆さんが会つ子ども達が生きる社会について

愛する子どもが生きる社会（小学生で約7～10年後）、中学生で（4～7年度）
どんな力をつけておいたらいいのかを予想する：時代の変化が激しい！

10年前はスマホが普及

20年前 カメラ付き携帯、インターネットに接続

30年前 携帯電話が普及し始めた

子どもが生きる社会はどんな時代か。その社会を予想して、力を付けておいてあげないといけない。3年前に、科学技術基本計画が策定された。ソサエテイ 5.0。国家戦略だから実現していく。そこでは、自動運転やAI家電が当たり前。

遠隔診療、ドローン宅配、スマート農業、会計クラウド、無人走行バス、

今、無いから便利だと思える。でも、未来の子どもたちは「この便利」が当たり前になっている。この「便利」から失われるものを知っておく必要があるだろう。

「スマート社会への対応は、スマートでない学校生活」

何が変わるかを明確にしておかないと、その時代になると、皆さんが教えていた子どもは大人になってしまつている。皆さんが会つた時に、必要とされるであろう色々な力を付けておいてあげないと行けない。ソサエテイ 5.0のメインになってくるのは、ビッグデータと人工知能だ。これは最適解を考えてくれる。それと相反するのが試行錯誤だ。自分と違う人やモノと関わることで試行錯誤ができる。試行錯誤するには人との関わりが必要であり、それをする場所が「学校」だ。学校にも様々な問題がある。でも、ここでしか成長できないものもある。

人工知能にできること：事実のみを見る、共通点をさがす 疲れない

人間にしかできないこと：事実以外を見る（夢や希望、生きている認識）、生きがい

個別性を見つけて、個性を尊重し、協働できること。

人間にしかできないことができる力をつけといてあげないといけない。

人間は、疲れる。でも、疲れるから工夫したり発明したりする。

機会に対して受動的になってしまつてはいけない。

ひらめき・創造・協調・共生ができる力をつけておく必要がある。

(12) 日本の教育の方向性

文部科学省も、子どもを動かし、保護者を動かし、地域を動かす、コミュニティスクールを勧めて

いる。コンピュータや情報機器に使われない人を育てる、受動的にならない、何でもうのみにしないためにプログラミング教育が導入された。少子高齢化でグローバルが教室の中にやってくる。だから、話す・聞くを大事にした英語教育が必要になる。外国人労働者がいないと成り立たない社会になっていく。日本語が話せない子どもが教室にいる時代がすぐそこにきている。

そういう社会で対応できる子どもたちを育てるのがみなさんの役割だ。

(13) みなさんに期待すること

プロの役割 その子が自分の力で育っていく力をつけていく仕掛けをする側になる

賢く仕掛けて、勇気をもって待つ。

どんなタイミングでどんな言葉かけをするかという方程式はないけれども待つ勇気は必要。先生は主役ではない。主役は子どもであることをいつも心に留めておいてほしい。

試行錯誤の中で心が育っていく学校にしてほしい。教員になると、たくさんの個性に出会うことになる。丁寧な出会いを繰り返してほしい（どうでもいい子は一人もない）。「出会い」を拾える感性を育ててほしい（意識することで育つ）。気が付かなければ何事もなく通り過ぎていく。それはいい先生になるためでもあり、子どもたちを幸せにするための「判断材料」を集めること。判断材料が多いほど、的確なアドバイスができるはず。

丁寧な出会いに必要なのが「好奇心」だ。出会いには喜怒哀楽が付いてくる。しんどい出会いもある。けれども、教員生活に決して無駄な出会いはない。その後に出会う子ども達に返すことができる材料になっていく。

今持っている価値観に閉じこもらないで、いろいろな出会いをしてほしい。好奇心をもってポジティブな出会いの中で成長していきましょう。 わくわく感をもって学校現場に出て行ってほしい。

